

論文の和文要旨

氏名 岡田 雄樹

(博士論文の題目)

ゴール型ボール運動における教材開発に関する研究
—スリーサークルボール教材を中心に—

(博士論文の要旨)

本研究では、学校体育における教材概念の歴史的変遷をたどりそれを整理し、その概念をもとにゴール型ボール運動の教材を開発・検討することを目的とした。

教材概念の整理では、一般教育学分野および体育科教育学分野の教材概念が、1950年代以降からその概念が確立するまでどのような歴史的変遷をたどってきたのかを論じている。

次いでゴール型ボール運動における教材開発および検討では、従来までのゴール型ボール運動の問題点や教材づくりの原理を踏まえ、スリーサークルボールを中心に、ハーフコートサークルシュートゲーム、オールコートスリーサークルを開発しその有効性を検討している。検討の結果以下のことが明らかになった。

一般教育学分野や体育科教育学分野では、1980年代以前は「教材」の概念が混沌としていた。特に体育科教育学分野では、教科論と密接に関わり「体育は何を教える教科なのか」が時代と共に変化していった影響により教材概念も規定できないでいた。その後、一般教育学分野の影響もあり、「学習内容」と「教材」の関係性が整理された。それは、「学習内容」が教育の目的であり「教材」は教育の手段であった。そこで岩田は、「学習内容」、「教材」、「素材」の概念をそれぞれと独立させ明確に定義した。それは、「学習過程において、教師が子ども（学習者）に学習されることを期待して用意した教育的に価値のある文化的内容を学習内容とし、「学習内容を習得するための手段であり、その学習内容の習得をめぐる教授＝学習活動の直接の対象となるもの」を教材とした。また、「既成のスポーツ種目は教授学的にみて」素材として位置づけた。そのことで、授業のねらいや、学習者に定着させていく内容が明確になり、学力の定着に結びつくことが明らかになった。

体育におけるボール運動は、国際的な動向に影響を受けながらカリキュラムや指導方法が変革してきたが、それだけでは学習内容を的確に習得させるには困難であった。その理由として、従来のボール運動の授業は、子どもたちの発達段階に合わない既存のゲーム(素材)を行う授業が一般的であったことが問題としてあげられた。そこで、学習内容をより確実に習得させるには、より課題が明確で、しかもその課題が頻繁に学習できる下位教材を

様式3号

開発する必要があることが明らかにされた。それは、シーデントップが提唱する、「ゲームの少人数化を図ること」、「親しみやすいプレイ条件をつくること」、「ゲーム時間を短縮すること」やソープの「大人のゲームの戦術的な複雑さのほとんどを保持しつつも、子どもが技術的・身体的に未熟なため遭遇する問題を軽減するゲーム」や「フル・ゲームの基本的なルールを保持しつつも、問題になる戦術的課題を誇張するように修正されたゲーム」という教材開発モデルを用いることが重要であることが明らかにされた。

それらを踏まえて開発されたスリーサークルボール教材は、ミニバスケットボールの約半分のコートを使用した。また、1ゲームは60秒間であり、アウトナンバー制やディフェンスによる身体接触を禁止にするなど攻撃側の簡易化も図った。それにくわえて、「ボール保持者と自分の間に守備者を入れないように立つこと」、「得点しやすい場所に移動し、パスを受けてシュートなどをすること」を集中して何度も経験できるようにドリブルを廃止した。そしてこの教材の最大の特徴であるサークルを設置することの意味は、サポート行動の有効空間を得点ゾーンとして目で見えるようにすることで、自らが「良いサポート」をしたかを得点としてフィードバックできるようにするためであった。その結果、小学校学習指導要領解説体育編の内容に記載されている「ボールを持たないときの動き」の習得に有効に機能することが確認された。しかし、スリーサークルボール教材はゴール型を系統的に学習するための重要な側面である、「シュート局面」や「攻守の切り替え」の学習には寄与しなかった。そこで、「ハーフコートサークルシュートゲーム」を開発しその有効性を検討した結果、「ボールを持たないときの動き」と「シュート局面での状況判断」の習得に有効であることが示唆された。また、「オールコートスリーサークル」を開発しその有効性を検討した結果、「ボールを持たないときの動き」や「切り替え時のサポート」、「切り替え時の状況判断」の質が向上した。くわえて、スリーサークルボール教材は中学年から取り入れても十分適用可能なことが示唆された。

このことから、スリーサークルボール教材のような有効性や発展性のある教材を開発することで子どもたちの学習内容の確実な習得に寄与できることが明らかになった。